

留学生へのスペイン語教育について
—学習者の多様化への対応の必要性について考える—
TADESKA 関西スペイン語教授法ワークショップ (2009年12月5日)
柿原武史

今回紹介する論文：糸魚川美樹 (2009) 「南米出身者の増加とポルトガル語・スペイン語教育—愛知県を中心に—」
『日本語学』5月臨時増刊号第28巻6号通巻第349号、pp.224-235

論文の概要

はじめに

1989年：出入国管理及び難民認定法改定→1990年施行以降、南米出身者急増。

ブラジル出身者 (2007年末：31万7千人、3位)、ペルー出身者 (6万人、5位)。

愛知県：ブラジル出身の外国人登録者数が全国最多。(約8万人、34.6%) ペルー出身者 (8492人、3.7%)。

ポルトガル語話者、スペイン語話者の増加とポルトガル語・スペイン語教育との間の関連？

日本におけるポルトガル語・スペイン語教育

中学、高校での英語以外の外国語教育は非常に少ない。

ポルトガル語、スペイン語が専攻できる大学

…両言語の話者の増加と専攻言語との間に関連を観察するのは難しい。

話者の増加への対応例

…東京外大多言語・多文化教育センター (在日ブラジル人児童への教材) や

愛知県立大学 (医療分野のポルトガル語・スペイン語講座) の取り組み。

近年…一般外国語としての開設数の増加により (?) 1、スペイン語教育分野の研究発表が盛んに。

例) イスパニヤ学会やSELEでの教育関係の発表、GIDE、TADESKAの設立。

日本におけるポルトガル語教育…一般的にブラジルのポルトガル語を対象。

スペイン語教育…スペインのスペイン語を扱うことが多い。

学習動機 (「外」の文化を学ぶツールから「必要性」から学ぶ言語へ)

ポルトガル語学習者＝友人にブラジル人がいる。在日ブラジル人向け日本語教師を志望。

スペイン語学習者＝公用語とする国の多さ、話者数の多さを挙げる者が多い。

→近年は友人、家庭内にスペイン語圏出身者がいるという者も。

→外国に行き初めて接することができる言語から身近に日常的に接する言語に。

愛知県におけるポルトガル語・スペイン語教育

愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻

南山大学外国語学部スペイン・ラテンアメリカ学科

— 専門科目、外国語科目でポルトガル語を開講。

1 疑問：一般外国語としてのスペイン語開設数は増えているのか？

文部科学省：2001年～「大学におけるカリキュラム等の改革状況について」と題する報告。

「外国語教育の実施状況」2000年度～2005年度を比較

→英語、それ以外の外国語も科目として開設している大学数＝年々増加→多様な外国語教育が充実？

スペイン語を開講する割合：2000年度：外国語科目を開講する全国公私立大学の34.2%→2005年度：32.7%

また、必修第二外国語の廃止や昼夜開講制などにより開講コマ数が減少している大学も多い。

ポルトガル語を専門に学べる大学が不在←教育分野における専門家の不足

需給ギャップ…「本当はポルトガル語を開設したいが教授者がいないからスペイン語」

自治体…スペイン語話者にもポルトガル語で対応する例

→両言語はロマンス諸語でよく似ているという認識。互いに「代替」されている実情→ロマンス諸語の類似、相違

愛知県立大学…2007年～3年間

「ポルトガル語スペイン語による医療分野地域コミュニケーション支援能力養成講座」

→医療関係者と外国人患者との間でのコミュニケーション能力を身につけるための講座。

入門から学ぶ講座、募集定員：各クラス15名。

ポルトガル語圏出身者が多い→ニーズ高い→ポルトガル語講座応募者が多いと予想された。

実際：「入門」：ポルトガル語講座応募者がスペイン語を上回る。

「中級」：スペイン語が二倍以上。

スペイン語は既習者が多く、ポルトガル語よりもレベルが高くなりがち。

→スペイン語「中級」は「入門」から学んできた者と、大学や仕事での既習者が混在→中級での多様な学習者。

教授者・教材

スペイン語教授者と同レベルのポルトガル語教授者を見つけるのは困難。

スペイン語：教授者、教材ともにポルトガル語より充実するも、医療向けなど専門分野の教材は少ない。

教授者も一般スペイン語教育しか担当したことがない。不安。

ポルトガル語は一般教材を使用。

おわりに

愛知県：ポルトガル語スペイン語の教育、情報提供の場、使用空間が増加。⇔専門家の不足。特にポルトガル語。

- ・待遇面も悪く、需要があっても、専門家が就労できる場は少ない。(無償労働) →関東・関西への人材流出。
- ・公的機関でのこれらの言語による情報提供は増加しているが、明らかな誤りも。チェック体制の不備。

研究：

ブラジル出身者の日本語習得に関する研究は多い⇔ポルトガル語/スペイン語教育研究からのアプローチは少ない。

地域社会における需要を重視する→「外国語教育」という枠組み越え→これらの言語の学習者と日本語学習者が同じ空間で、特定の専門分野の言語使用を学習しようという言語教育の可能性も考えられる。

地域/言語/専門分野を超えた教育研究者の連携求められる。

社会的ニーズと言語教育の在り方の議論。

この論文を読んで得られたヒントから、本日の活動へ(討論テーマ)

- ・(スペイン語は)外国に行つて初めて接することができる言語から身近に日常的に接する言語に

→学習者にとって本当に身近になっているか? 身近な言語であることを学習者に伝える工夫をしているか?

コメント・議論

* 将来役立つのか? →スペイン語圏との貿易など(スーパーに並ぶ商品など) 身近なところを紹介

* 身近でなければいけないのか? 情報が多すぎて、かえって興味を失うのではないか?

* スペイン語圏出身者を「見かける」のと「日常的に接する」のとは別物。それほど接触機会はない。

* スペイン語圏出身者の増加…知ってもらいたい事実ではあるが…

* スペイン語圏出身者の居住地の偏り、集中→地域、個人によって彼らとの接触の度合いは大きく異なる。

* このような現象について語り続けることが重要ではないか。

*関西圏では、このような話をしても、「身近」な感じはしない。現実的ではない。

*中京地区では、学生の方が身近な言語として接している。ボランティア活動などに参加し、非常に関心が高い。

*友人がペルー人という学生なども出現。

• **ロマンス諸語の類似、相違**→授業にロマンス語話者の留学生が参加した場合、どう対応している（しうる）か？

• **中級での多様な学習者**

→授業に様々な学習歴を有する学習者が存在し、レベルが異なる場合の中級クラスの運営は？

外国語学習スタイルが異なる留学生が存在する場合は？例) 中級講読：留学生に日本語訳させる？

コメント・議論

*むしろ初級の方が大変。早く終わっている学生向けに別の問題を配ってやらせるなどの方法がある。

*日本語訳読の授業：日本語の勉強にもなるのではないか。→良いのではないかと意見多かった。

*留学生を特別扱いはできない。すべきでない。

*留学生が文法の授業を「日本語」で理解することはやはり難しい。

*「講読」…訳読だけでなく、表現を使ったアクティビティなども効果的。

*話せるけど読めないネイティブ学生の例も。

*自分が話すスペイン語と、授業で教えるスペイン語が異なる場合

→注意しないと、自分のスペイン語を低く評価してしまう危険性。

*留学生の出身地域に関する新聞記事を読むのも良いのではないか

(例：ブラジルに関するニュースのスペイン語記事)

• **これらの言語の学習者と日本語学習者が同じ空間で、特定の専門分野の言語使用を学習しあうという言語教育**

→ブラジル出身者、スペイン語圏からの帰国子女などがクラスに存在する場合の相互学習の可能性？

日本人学生にも、ロマンス語話者にも有意義な授業は可能か？

*一つのクラスとしてのまとまりが重要。留学生を特別扱いし、「浮く」ことがないように注意すべき。

*英語で対応するというのは、逆効果。特別扱い、他の学生との関係。日本語でやった方が留学生にも役立つ。

*周りの学生から自発的にサポートする雰囲気になるのが一番いいのでは。